

第12章 軍事の次元でのインプリケーション

軍事の次元でのインプリケーションについて考えるに当たり、日本という島嶼国家の概要について述べることから始めよう。

日本は6,852の島から成り立ち、その陸地総面積は378,000平方キロメートルで世界の第62位である。ここから日本の法律で本土と定義されている、四大島である本州、北海道、九州及び四国、さらには沖縄本島の面積を除くと、6,847島の合計面積は約16,000平方キロメートルで、これは日本の総面積の4.2パーセントに過ぎない¹³⁸⁶。各島嶼の面積で一番大きいものは択捉島の約3,182平方キロメートルから、小さいものでは沖ノ鳥島の約7平方メートルまで様々である¹³⁸⁷。

イギリスとフォークランド諸島との距離には到底及ばないが、その広がりには結構大きく、最北端の択捉島と最西端の与那国島の間は3,294キロメートル、また択捉島と最南端の沖ノ鳥島の間は3,020キロメートルある。日本の領海と排他的経済水域を合わせた面積は約447万平方キロメートルに達し、世界第6位の広さを誇る¹³⁸⁸。そして多数の島嶼がこの水域確保に大きく貢献していることは言うまでもない。

次に、上記の事実を踏まえた上でフォークランド戦争の特徴から日本に対する軍事的インプリケーションについて考えてみよう。

戦略的背景から第1に、この戦争はイギリス、アルゼンチン共に予想していなかった戦争であり、両軍共に戦争遂行上大きな問題を抱えることになった。翻って日本は、将来の島嶼の戦いに対してその様相を正確に予測し、装備、編制、訓練などでそれに備えなければならないことは当然であろう。

しかしこれには大きな困難が伴う。例えば、日本の排他的経済水域が広大なこと、また島嶼ごとに条件が大きく異なることで、多様な条件に備えなければならないからである。また、基本的に日本は島嶼を防衛するという立場であるため、戦闘の初めに時間、場所、そして手段を選べないという制限が付きまとう。様々な条件に対応しなければならないということで、防衛力には冗長性と多くの機能が必要とされるであろう。

第2に強力な同盟国の確保である。イギリスと同様に日本は世界最大の軍事力を有するアメリカと良好な関係にあり、水陸両用作戦などの共同訓練も行い、この点はあまり心配ないように思われる。しかし日本とアメリカが共同して戦うのか、あるいはフォークランド戦争のようにイギリスが戦い、アメリカが後方支援などの援助をするのか、戦いの様相は予想が付かない。

¹³⁸⁶ 財団法人日本離島センター編『離島振興ハンドブック』国立印刷局、2004年、1頁。森野軍事研究所「離島の防衛問題(1) - 離島の現状、振興策の実態」『軍事研究』35巻6号、2000年6月、164頁。「国の面積順リスト」『ウィキペディア』

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E3%81%AE%E9%9D%A2%E7%A9%8D%E9%A0%86%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88> (2013年8月18日アクセス)。

¹³⁸⁷ 国土地理院「島面積」(平成24年全国都道府県市区町村別面積調)

<http://www.gsi.go.jp/KOKUJYOHO/MENCHO/201210/shima.pdf> (2013年8月18日アクセス)。山田吉彦著『日本の国境』新潮新書、2005年、61～62頁。

¹³⁸⁸ 山田著『日本の国境』14～15頁。

島嶼問題は日本の主権に関わることであるため、戦いで一番厳しいところを負担しなければ主権国家の立場に影響を及ぼすであろう。そうであれば、敵前に上陸することや相手の防空能力を制圧することなどは、自ら実施できなければならない。

また、戦いで弾薬などの消耗が、平時の見積もりを大きく超える事態はしばしば起こる。フォークランド戦争でもイギリスは予想以上に弾薬を消費し、迫撃砲弾、サイドワインダー空対空ミサイル、ハーブーン空対艦ミサイルなどの弾薬をアメリカから供給してもらったという経緯がある。いざという時のために装備品の共通化についても考慮する必要がある。

次に、軍事面でもやや下位の次元に属する戦術面のインプリケーションについて考察してみよう。

第1に、航空優勢の確保であるが、まず優秀な戦闘機及びミサイル、そして優秀な操縦者の確保が必要となる。また、それらを効果的に運用するためには、空中早期警戒機などが必要になることがフォークランド戦争で示された。また、この戦争では陸上を基地とする航空機の限界が示された。つまり、陸上を基地とする航空機の戦力投射密度は、基地からの距離に反比例するということである。加えて、空中給油機は少数では実質的意味がないことも実証された。

すなわち日本の広大な排他的経済水域を考える時、陸上を基地とする戦闘機では、常時、航空優勢を確保できない水域が大きく広がっているのである。これに対処するには、水域によっては空中給油機を増やすことで対処できる場所もある。だが、極めて遠い水域では艦艇を母体として、そこから発着艦できる戦闘機も選択肢の一つとなるであろう。

戦術面の第2として、海上優勢の確保を挙げたい。これは、島嶼部すなわち浅海面での高い対潜水艦戦能力を維持する必要性を意味する。また、前述したように、遠隔の排他的経済水域では、海上及び海中の母体が戦力発揮の基盤となり、そのためには艦艇の高い戦闘能力が必要となる。

戦術面のインプリケーションの第3は、陸上での戦いにおける火力の集中と機動の必要性である。まず火力の集中に関しては、目標となる島嶼にどれだけ迅速かつ大量に各種火力を集中できるかに掛かっている。また島嶼作戦においては、航空優勢ならびに海上優勢を確保した側が、航空機による近接地上支援及び艦砲による火力支援を行うことができ、それだけ有利に陸上での戦いを進めることができる。

機動については、各島嶼の地理的特徴によって大いに異なってくるであろう。しかしヘリコプターは天候に影響を受け易い点を除けば、大部分の地理的条件に適合するように思われる。機動力の発揮を車両によるか、ヘリコプターによるか、舟艇などによるかは別として、それらのための整備施設、整備人員、交換部品と燃料の集積が、島嶼あるいはその近辺に配置した船舶に必要なことは言うまでもない。

戦術面のインプリケーションの第4として、情報、監視、偵察に関するものが挙げられる。イギリスはこれが不十分であったためにアルゼンチンによるフォークランド諸島の占領という事態を招いた。同様に、アルゼンチンもイギリスがサン・カルロスに上陸するまで、上陸地点について不明であった。

日本にはその轍を踏まないために、継続的な通信情報、信号情報などの諜報活動と、広い排他的経済水域で常に人工衛星、空中早期警戒管制機ならびに哨戒機などによる監視偵察が求められる。またイギリス

は、開戦直前に哨戒艦「エンデュアランス」による監視により、アルゼンチン側の行動を知ることができた。さらにイギリスの特殊部隊の潜入によるフォークランド諸島内の偵察は、上陸地点の決定に大きな役割を果たした。つまり、多くの次元、多くの手段による情報、監視、偵察が必要なのである。

戦術面のインプリケーションの第5として、統合作戦に関するものが挙げられる。島嶼防衛は、陸、海、空という3つの領域にまたがる連続的な作戦行動であり、統一された目的の下で相互に支援し、互いの意図を知り情報の共有を図らなければ達成できない。自衛隊は2006年から統合運用体制に移行した。

しかしそれまでの長い間、陸、海、空それぞれの関心に基づいて各自衛隊を運営してきた。その習慣から抜け出るように教育及び訓練が必要であろう。島嶼防衛のためには、統一した作戦計画を定め、三自衛隊それぞれ担当部隊を決め、指揮通信系を整え、互いに顔を合わせての訓練を何度も繰り返す必要がある。

以上、フォークランド諸島をめぐる戦いから、島嶼国である日本の立場から見た場合、編制、装備、訓練の面でインプリケーションが多数挙げられることが判明した。もちろん、しばしば「三〇年一世代」と言われるように、フォークランド戦争終結から30年以上の時間の経過を考える必要もある。

ちなみに、フォークランド戦争に使用されなかった兵器システムなどを以下で列挙してみよう。AWACS/AEW、イージス艦、無人航空機、GPS、ステルス機、ステルス艦、巡航ミサイル、ネットワーク・セントリック・ウォーフェア、などである。既に日本が取り入れているものも多数あるが、この一世代の軍事技術の進歩を考慮しつつ、フォークランド戦争でのインプリケーションを活用しなければならない。

また、この戦争で日本をイギリスになぞらえることがあるが、ここで注意しなければならない点は、わずかの違いでアルゼンチンが勝利したかもしれないとの事実である。

例えば、コーデスマンとワグナーは、①アルゼンチンの技術、訓練、信管に関する問題が少しアルゼンチン側に有利になり、②あと2〜3隻イギリスの艦船を沈没していれば、イギリスは撤退したであろうと述べている¹³⁸⁹。さらにペドラージャは、アルゼンチンの失敗として、①目標を艦艇に集中したこと、②不発爆弾、③多数機編隊を組まなかったこと、の3つを挙げ、このうち不発爆弾の問題だけでも改善されていれば、イギリスはフォークランド諸島の奪還を諦めたであろうと主張している¹³⁹⁰。

これらの点を踏まえながら、今後、フォークランド戦争のインプリケーションについてさらに検討を続ける必要がある。

¹³⁸⁹ Anthony H. Cordesman, Abraham R. Wagner, "The Falklands War," in *The Lessons of Modern War*, vol. III (Boulder, CO: Westview Press, 1991), p. 351.

¹³⁹⁰ René De La Pedraja, "The Argentine Air Force versus Britain in the Falkland Islands, 1982," in Robin Higham, Stephen J. Harris eds., *Why Air Forces Fail: The Anatomy of Defeat* (Lexington: The University Press of Kentucky, 2006), pp. 255-256.